［曲 名］Intermezzo nel opera A Basso Porto

間奏曲 歌劇「南の港にて」

［曲 種］Intermezzo

間奏曲

［作曲者］Niccola Spinelli

ニコラ スピネルリ

［編曲者］Jiro Nakano

中野二郎

作者は１８６５年7月２９日トリーノに生まれ、１９０９年１０月１７日ローマに逝いた作曲家。

セラシオ教授及びナポリの音楽学校に学んだ。

１８８９年かのソンツオーニョ主催の作曲コンクールに歌劇「ラヴィリア」を提出して二位を入賞を果たした。

この時の一位がマスカーニの「カヴァレリア・ルスチカーナ」である。

其の後１８９４年にコローニュで初演されたのが本歌劇「南の港にて」である。

この歌劇はナポリの細民窟を題材にしたもので其のオーケストラ・スコア中にスピネルリはマンドリンとギターを数ヶ所書き入れた。

既ち第二幕と第三幕の終りのテノールの唄に之等の楽器は伴奏を務める。

然し第三幕の前奏曲としたマンドリンとオーケストラとの優婉な間奏曲は最も成功を収めた。

この革新的な楽器編成は事実この歌劇の価値を甚だ大ならしめて欧州に於けるこのオペラの公演に際し、

この間奏曲に対する喝采は驚くべきものがあったと云われる。

この曲の最特色とするところはマンドリンの為に書かれたパートとヴィオロンチェロに当てられた旋律である。

この歌劇の英国に於ける初演は１８９９年３月ブライトンに於けるカール・ローザ商会から催された。

又１９００年１０月１１日この間奏曲はヘンリー・ウッドの指揮下にクイーンス・ホール・オーケストラに依って演奏され、

マンドリンパートはフロリモンド嬢とセザール・コスタースとに担当された。

アメリカのマンドリニスト、サミュエル・アデルスタインはその頃マンドリン奏法の勉学にイタリアに出かけた時、
このオペラのローマでの公演を見た時の印象を次の如く述べている。
「１８９５年３月１１日私は幸にもローマのコスタンツィ劇場で、ニコラ・スピネルリの新作になる歌劇「南の港にて」を見ることが出来た。
この時は非常な人気でイタリア皇帝、皇后両陛下も劇場に臨まれ、ローマの貴族高官が多数来場した。
この歌劇は「カヴァレリア・スルチカーナ」と稍、同じ形式を帯びた愛と嫉妬を主とした悲劇であった。
音楽は非常に美しく、各楽器の配合が巧みに出来ていた。
就中最も観客に感動を与えたのは作者がこの歌劇の為に特に作曲をしたマンドリン独奏曲で、
之はローマのマンドリン名手マルドゥラがオーケストラの伴奏で演奏して非常な喝采を拍し数回礼奏を続けなければならなかった」
オペラにマンドリン独奏パートが挿入されたことは珍しく、又佳曲でもあるので、
マンドリンオーケストラのバックに書き換えて記録しておきたいと思っていたものである。

1971年8月30日発行

イタリアマンドリン百曲選第13集より